

【 復活讃詞 第1調 】

きゆ せ いしゅよ、イウデヤのひとはかをふうじて、へいそつ  
 救 世 主 人 墓 封 兵 卒

なんぢのいさぎよきみをまもるとき、なんぢはみっかめにふくかつ  
 爾 潔 身 守 時 爾 三 日 目 復 活

して、せかいにいのちをたまえり。ゆえにてんぐんはなんぢ  
 世 界 生 命 賜 え り 故 天 軍 爾

いのちをほどこすのしゅによんでい、ハリストスや、こうえいは  
 生 命 施 主 呼 日 う 光 榮

なんぢのふくかつにきし、こうえいはなんぢのくににきす、  
 爾 復 活 光 榮 爾 國 に 歸 す

ひとりひとをいつくしむのしゅや、こうえいはなんぢのおもんばかり  
 獨 人 慈 主 や 光 榮 爾 慮

にきす。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまもいつもよよ世  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 す 今 も 何 時 も 世 世

にと、アミン。

しととひとしくどうざなるものちゅうじつにしてしんちなる  
 使 徒 等 同 座 者 忠 實 神 智

ハリストスのえきしゃ、せいなるしんにえられたるふえ、ハリストスの  
 聖 役 者 聖 神 撰 筆 笛 聖 徒 聖 徒

あ い に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う し ょ う し ゃ 、  
 愛 満 器 我 國 光 照 者 、

あ し と し ゆ き よ う せ い ニ コ ラ イ よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た め 、  
 亜 使 徒 主 教 聖 爾 羊 群 爲

お よ び ぜ ん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い さ ん しゃ に い の り  
 及 全 世 界 爲 め に 、 生 命 賜 聖 三 者 祈

た ま え 。  
 給

司祭) ( 黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と

なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、

願う者に智慧と明悟とを興え、 罪を行う者を棄てずして、 其救の爲に痛悔

を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な

る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と

なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を

以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と

を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる

生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世

に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、  
 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生者、  
 われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 我等をあわれめよ。せいなる  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなる  
 聖なる常生者、我等をあわれめよ。せいなる  
 かみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 神、聖なる勇毅、聖なる常生者、我等を  
 あわれめよ。こうえいはちちとことせいしんにきす、いまでも  
 憐れめよ。光榮は父子聖神に歸す、今も  
 いつもよよに、アミン。せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 何時世に、アミン。聖なる常生者、我等を  
 あわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 憐れめよ。聖なる神、聖なる勇毅、せいなる  
 じょうせいのものよ、われらをあわれめよ。

司祭) ( 黙誦: 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 提綱 (プロキメン) 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐れを我等に垂れ給え、

しゅ よ 、 われら なんぢを たのむ が ごとく、 な んぢの あわれ みを  
 主 我 等 爾 頼 の む が 如 く、 爾 ぢの あ わ れ み を

われらに た れ た ま え 。  
 我 等 垂 給

誦經) <sup>ぎじん</sup>義人よ、<sup>しゅ</sup>主の爲に<sup>よろこ</sup>喜べ、<sup>さんえい</sup>讚榮するは<sup>ぎしや</sup>義者に<sup>かな</sup>適う、

しゅ よ 、 われら なんぢを たのむ が ごとく、 な んぢの あわれ みを  
 主 我 等 爾 頼 の む が 如 く、 爾 ぢの あ わ れ み を

われらに た れ た ま え 。  
 我 等 垂 給

誦經) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>われらなんぢ</sup>我等爾を<sup>たの</sup>頼むが<sup>ごと</sup>如く、

な んぢの あわれ みを われらに た れ た ま え 。  
 爾 ぢの あ わ れ み を 我 等 垂 給

【 使徒經 (アポストロス) コリント後書9章6節~11節 】

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup>聖使徒パウエルが<sup>じん たつ</sup>コリント人に<sup>こうしょ</sup>達する<sup>よみ</sup>後書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup>謹みて<sup>き</sup>聴くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup>兄弟よ、<sup>とぼ</sup>乏しく<sup>ま</sup>稼く者は<sup>とぼ</sup>乏しく<sup>か</sup>穡り、<sup>ゆたか</sup>豊に<sup>ま</sup>稼く者は<sup>ゆたか</sup>豊に<sup>か</sup>穡らん。人 <sup>ひと</sup>各 <sup>おの</sup>其 <sup>おの</sup>心の

<sup>ほつ</sup>欲する <sup>ところ</sup>所に <sup>したが</sup>随い、<sup>うれい</sup>憂に<sup>よ</sup>由るに<sup>あら</sup>非ず、<sup>し</sup>強いて<sup>な</sup>爲すに<sup>あら</sup>非ずして<sup>ほどこ</sup>施すべし、<sup>けだし</sup>蓋 <sup>かみ</sup>神は <sup>たの</sup>樂

<sup>あた</sup>みて <sup>もの</sup>與うる者を <sup>あい</sup>愛す。且 <sup>かつかみ</sup>神は <sup>なんぢら</sup>爾等を <sup>しょおん</sup>諸恩に <sup>と</sup>富ましめんことを <sup>よく</sup>能す、<sup>なんぢら</sup>爾等常に <sup>およそ</sup>凡の

<sup>こと</sup>事に <sup>おい</sup>於て <sup>た</sup>足らざるなくして、<sup>およそ</sup>凡の <sup>ぜんじ</sup>善事を <sup>な</sup>爲すに <sup>ゆたか</sup>饒ならん <sup>ため</sup>爲なり、<sup>しる</sup>録されしが <sup>ごと</sup>如し、<sup>いわ</sup>云く、

<sup>かれ</sup>彼は <sup>さん</sup>散じて、<sup>ひんじゃ</sup>貧者に <sup>ほどこ</sup>施せり、<sup>そのぎ</sup>其義は <sup>よよ</sup>世々に <sup>そん</sup>存すと。 <sup>ま</sup>播く者に <sup>もの</sup>種を <sup>たね</sup>與え、<sup>あた</sup>食の爲に <sup>しよく</sup>餅

<sup>そな</sup>を <sup>もの</sup>備うる者は、<sup>ねが</sup>願わくは <sup>なんぢら</sup>爾等が <sup>またね</sup>播く種を <sup>そな</sup>備え <sup>かつふや</sup>且殖し、<sup>またなんぢら</sup>又 <sup>ぎ</sup>爾等の <sup>み</sup>義の <sup>ま</sup>實を <sup>たま</sup>益さんことを、

<sup>なんぢら</sup>爾等が <sup>およそ</sup>凡の <sup>こと</sup>事に <sup>と</sup>富むに <sup>よ</sup>由りて、<sup>ひろ</sup>博く <sup>ほどこ</sup>施すを得ん <sup>え</sup>爲なり、<sup>こ</sup>此れ <sup>われら</sup>我等に <sup>よ</sup>由りて <sup>かみ</sup>神に <sup>たまつ</sup>奉る

かんしゃ な  
感謝を作す。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。「彼は貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう」と書いてあるとおりでである。種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。

\*\*\*\*\*

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、ア ril イヤ、

【 ア ril イヤ 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、



ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 。

誦經) <sup>ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう</sup> 願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん、



ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 。

誦經) <sup>おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ</sup> 大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド及び其裔に世に

<sup>た もの われなんぢ な うた</sup> 垂るる者よ、我 爾の名に歌わん、



ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ  
 畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所  
 おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ  
 を思い且つ 行 いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、  
 なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん  
 爾は我が 靈 と體との光 照なり、我等 爾 と 爾の無原の父と至聖至善にし  
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ  
 て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 15 章 21~28 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。  
 主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮 爾 歸 す。

司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 彼の時イイス、ゲンニサレトの湖の濱に立ちて、二の舟の湖に在るを見たり、漁  
 者は舟を離れて網を洗えり。彼はシモンに屬する一の舟に登りて、少しく岸より離れ  
 んことを請い、坐して舟より民を教えたり。語り竟りて、シモンに謂えり、深き處に移り、  
 網を下して漁せよ。シモン彼に對えて曰えり、夫子よ、我等終夜勞して、得る所な  
 かりき、然れども爾の言に依りて、我網を下さん。既に之を行いて、魚を圍めるこ  
 と甚多く、網裂くるに至れり。乃他の舟に在る侶を招きて、來り助けしむるに、彼  
 等來りて、魚二の舟に切ちて、幾ど沈まんとせり。シモンペトル之を見て、イイスの膝  
 下に伏して曰えり、主よ、我を離れよ、我罪人なればなり。蓋彼及び彼と偕に在りし  
 ものは、皆漁りたる魚の爲に甚驚けり、シモンの侶たりしゼヴェデイの子イアコフ及  
 びイオアンも亦然り。イイスシモンに謂えり、懼るる勿れ、今より後爾人を漁らん。  
 彼等舟を岸に曳き、一切を捨てて、彼に従えり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、そこに二そうの小舟が寄せてあるのをごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。その一そうはシモンの舟であったが、イエスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群衆にお教えになった。話がすすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましよう」。そしてそのとおりにしたところ、おびたしい魚の群れがはいって、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をしたので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入れた。そのために、舟が沈みそうになった。これを見てシモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」。彼も一緒にいた者たちもみな、取れた魚がおびたしいのに驚いたからである。シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。すると、イエスがシモンに言われた、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」。そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。

\*\*\*\*\*



しゅよ、こうえいはなんちにきし、こうえいはなんちにきす。

主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮 爾 歸 す。

(金口イオアンの聖体礼儀 2 へ)